同人作品

お背戸　　秋山義仁

縄紋の生れし里の陸奥の白銀世界に鶴が舞う
遠方の手をふる女の黒髪が風に吹かれて我を誘う
愛しくて悲しくて海へ共に歩かん共に唄わん
朝日受け日本のどこかまた会わん夢の名残りの影を追う日々
旅の旅われは何して老いぬらん山登り川下り移ろい知りて
奥山の雪解の水に浮くもみじ里ではこれから紅葉黄葉
蝉が鳴く息継ぎなしの正午過ぎ君が居て我が居るブナの影
空蝉は去りし人の想いにて幹より外し土掘り埋める

子を産まぬ式部の老いの果て今日のつれづれ如何にせんとや
お背戸に椎の実おちる遅い午後服着た子猿がまた枝ゆする

白い夏の日　　石邉綾子

ときどきは思い出してと五線譜の音符に当てはめ静寂(しじま)しらじら
強烈な暑さを笑うかのような入道雲の反射は白い
この夏の一夜たった一夜だけ深き眠りにつきたいけれど
雷鳴が通り過ぎれば蝉時雨せかされるかのようなひと日に
白にごり水晶体も世の中を見たくはないと言っているかの
玄関の物言いたげなヒマワリを残像にして今日もこれから
知らぬ間に受けた憎しみ振り返るラピスラズリを握りしめつつ
飲み込んで貯めてそのまま吐き出さずこのまま膨れ張り裂けるまで

少しずつ地下深くから吹き出してガス抜きすべしわがプラネット
一本の線香花火を人知れず見守るように消えゆく後も

台風が来る　　井上省吾

スーパーへ買物に行き汗をかきクーラーつけて身体を冷す
服着替え畑草取り出る用意雨降り始め濡れずに済んだ
台風の対策として我家では買物済ませ雨戸を閉めた
台風が雨風連れてやってくる支柱を立てて野菜を護る
曇り空風が強まり雨も降り今夜大荒れ台風が行く
お盆入りこの静かさは台風が近付き来る前触れかなと
お盆入り野菜供えて名前呼び招霊をしてお迎えをする
採り立ての野菜供えてお盆入り家に迎えて在りし日偲ぶ

暑い季節

暑い夏どう乗越えて生きていくしっかり食べてやる気を出して
夏の空スカイブルーに白い雲飛ぶ飛行機も輝いている
空ボトル水道水を備蓄するその数なんと十数本
暑い日は外へ出るのをためらって椅子に座りて時間を過す
この夏は暑さ続きで苦労する涼しい朝にひと仕事する
暑さゆえ鳥の姿や声さえも見ることもなく猛暑の午後
窓開けて外の空気を部屋の内涼しさもなく猛暑の外気
ゴロゴロと鳴る雷の音響き久しぶり聞く夏の日の午後
停電に蓄電池出し用意する冷蔵庫には特に気遣う
雷の音に驚き身をすくめ暗い空には稲光見る
久しぶり雷が鳴り雨が降り気温おちつき涼しく感じ

稲光り音が鳴るのをじっと待ち遠い近いを判断してる
朝早く涼しい内に外へ出て体動かし片付けをする
庭の木の伸び過ぎた枝剪定し見た目すっきり風通しよし

牢獄の夏　　**甲村雅俊**

牢獄の窓から見えるひさかたの雲湧き上がる八月の午後
豪姫と名付けられたるキジ白と夏の幽霊塔に住みをり
毎日が遊泳禁止の川遊びそのあやふさに気が塞ぎをり
楽しみは親の襁褓を替へてから部屋でのんびり猫と寝るとき
暑かつた今年の夏に脳みそは茹で上がりたりぐつぐつ煮えて
温暖化すると凍死が減るらしくいのちを惜しむ神の計らひ
暑き夏がんばつたなあ来年は今年以上に暑くなるかも

罪人

わが生まれ三十二年後今世紀思ひ起こせばいろいろあつた
間違ひを犯せば犯すほどわれもどうでもよいと思へてくるね
生き甲斐を求めて足掻きゐたりしか裁きを受くる罪人どもは
どん底の今と思へば今はまだそのどん底の序の口だつた

短歌を書く

最近の言葉で言へばぱとすとはヘイトなのですあのヘイトだよ
われわれの五人に一人は繊細さんＨＳＰは治らずといふ
この頃は歌詠みめつきり少なくて短歌を書くとこの人も云ふ
先づカバンそれから靴を洗はうか酷使さるるが再生を待つ

猫の爪

巻き爪の猫の爪切りむずかしく動物病院に連れていかねば

嫌がれる猫をキャリーに入れるのはわが肝つ玉試さるる技

猫用の爪切りを手におそるおそる近づけばすぐ猫に叱らる

うつうつと学生時代過ごせれば社会に出たるときの喜び

雨が降る彼岸中日前夜なりむかしのわれに戻りて街へ

老後とは　　氷室敬子

老後とは看護士と作業療法士のたたかいでわれは素直に評価を受ける

看護婦は患者のいうことをよくきいて反発してはならない

しんしんと更けゆく夜に一人出でゆく誰もいない暗闇の中に

われ一人入りゆく夜のみち清くあれば怖くはない

夏至　　本田洋子

昼長き夏至とふ日が六月の梅雨の最中に在ること知りぬ
昼下がりカーテン揺らす涼風の眠気を誘う「タイスの瞑想曲」
シミにアザゆっくり鏡見ておらずあまりに汚く化粧じみたり
七夕に蝉の泣き声耳にせり待ちきれないと遠慮しがちに
室内の寒暖知らせる赤青燈いつの間にやら赤一色に
渦巻きて氷カラカラ回ってるコップの中のアイスコーヒー
夏の花無くてあまりに淋しくて一株買い来たマリーゴールド

暑中御見舞

盆踊り曲が流れてくる宵は　そうだ地域の夏祭かな
詩心（うたごころ）ペンを持っても眼覚めない　自己放棄をいつまでするの
真っぴる間シャワーの後の冷茶一杯　冷蔵庫さん頑張っている

起きられぬ罹(かか)ってしまった熱射病　去年も飲みしお薬がある
油蝉これで何匹？　一五匹！　外を通りし子等のはしゃぎ声
重症になりたら吾はいかにせむ　付き添いもない救急病院
安静に暮らしなさいと医者は言ふ　それができれば苦労なけれど
ハンカチに保冷剤入れて首に巻く　じっとしていても滲(にじ)み出る汗

秋虫

コオロギの初鳴き聞きぬ宵のこと暦を見れば今日は立秋
被爆者が次第に亡くなる広島のドームは語る三度(みたび)許すなと
台風の長き居座(いすわ)りもどかしく憂さと雨量溜まりに溜まり
孫達と行ったり来たりのお盆にも影響ありし台風七号
朝まだき秋虫たちの合唱がまばらに聞こゆる台風一過
日も詰まり夜明けも遅くなりにけり秋虫の声叢にしきり

リコリス　　丸山光

少しづつみ国へ帰る人の増え玄関脇に白きリコリス
雨風に支柱は折れてちから尽き皇帝ダリア一夜にて果つ
駅までも歩くことさえ疲れ果て百日草に笑われている
紙だけを閉じるのではないホッチキス私の腹に六本の針
古希迎え二割負担の医療費をよろこびながら受診がふえる
決定打とならぬジャブなど繰り出してやりあう妻と息子のバトル
股関節・肩に腰痛・脚しびれ二人合わせて満身創痍
知識ゆえ蓄積されて進化する人を殺める軍事兵器は
自分では逃れられない痛み持つステージ４の婦人の笑顔
治療ごと下着を下ろせと指示されて手伝い無用と自分で下げる
すり減った母の残せし印鑑を最後に押して母を葬る

人生を春夏秋冬たとえて語る冬が終わればまた春と講師

戦争をしないためなら戦争も辞さないような首相の談話

体型がまろやかになる副作用もろてで胸を優しく包む

メーターの四千円を過ぎるころ妻と私の会話は止まる